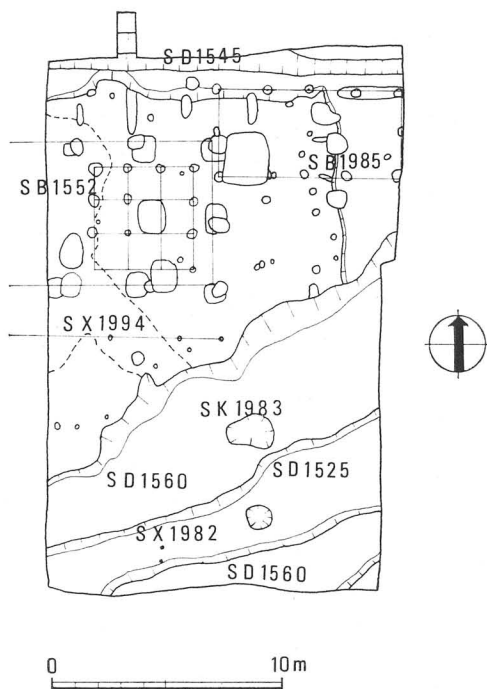


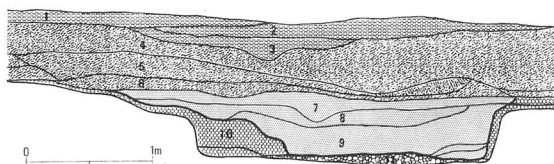
II 検出遺構

今回の調査で検出した遺構は、掘立柱建物2棟・堀1条・溝3条・土壌3基・性格不明のSX1990等がある。SB1552は桁行2間分と妻柱列を検出し、昭和52年度調査分と合せて2×7間でおさまる東西棟になった。桁行・梁間とともに10尺(3.0m)等間で、屋内に棚状施設を持ち倉庫的な建物と考えられる。従前の調査ではSB1552はほぼ同じ場所で建て替えられているとされていたが、今回の調査で重複する一方の穴は柱抜取穴である事を確認した。SB1985は2×4間の小規模な東西棟で径約10cm程度の柱根が残る。桁行・梁間とともに7尺(2.1m)等間。SB1985はSB1552の柱抜取穴・SD1545を切り掘形が掘られており、年代的には6坪の廃絶に近い時期に比定されよう。SB1552の南2.1mにあるSX1994はSB1552の足場穴あるいは目隠堀と考えられる。SD1545は素掘りの南北溝で3条条間路と6坪を画す築地の南雨落溝に想定され、巾約2.1m、深さ0.6mで底が一段深く掘られている。SD1545の埋土は3層あり、最上層は炭を多量に含む暗灰褐砂質土で奈良時代末の土師器・土馬が多量に出土した。下位の2層は遺物は少ない。SD1525の南岸には橋の据え付け痕跡とも考えられる3条の溝状遺構がある。導水路SD1525は旧河川SD1560の流路をそのまま利用した形で、その堆積を切って掘られている。巾約2.5m、深さ0.4mで3層に分かれ、第8・9層から木簡38点が出土した。ブール状遺構にとり付く近くには、杭が2本打ち込まれている。旧河川SD1560は巾約12mで堆積土から布留式土師器が出土した。導水路が機能している期間には旧河川の浸食作用で形成された崖面・氾濫原は埋められずにそのまの形を留めていた事も明らかになった。この他、SD1525の北岸の小土壌SK1983から「侍従」の墨書土器が出土している。



第2図 発掘遺構図

H=60.0m



第3図 導水路SD1525土層断面図

- | | |
|---------|----------|
| ① 床土 | ⑦ 暗灰砂質粘土 |
| ② 明茶褐土 | ⑧ 灰緑砂質土 |
| ③ 灰褐砂質土 | ⑨ 灰黒粘土 |
| ④ 茶褐粘土 | ⑩ 灰緑砂質土 |
| ⑤ 灰褐粘土 | ⑪ 砂礫 |
| ⑥ 黒褐粘土 | |